

## 明治、光と影。漱石とその時代

- 1、 夏目漱石が「吾輩は猫である」を書いて、作家としての道を歩き始めたのが、明治38年（1905年）
- 2、 東洋の島国である日本は世界5大強国の一つである帝政ロシアとの戦争の真ただ中、旅順要塞の攻防戦で、国民がやきもきしているさなか、漱石はひとり、書齋にこもって猫を主人公とする風変りな小説を書いていた。そして、日本中が旅順陥落の号外の鈴の音で湧きかえっているとき、「ホトトギス」に発表した第1章が偉く評判を呼んだ。
- 3、 漱石は慶応3年（1867年）1月生まれ、大正5年（1916年）12月に死んだ。
- 4、 日露戦争は38年3月の奉天会戦、5月の日本海海戦を経過し、9月アメリカ大統領ルーズベルトの仲介により、講和条約が調印され、それは、日本が勝者であることを世界に確認させた、輝ける日であった。しかし、実は、勝利とは言え、国力を使い果たしてのギリギリの惨勝であった。戦費の総額19億8千万円余の78%は、国庫債券と一時借入金で支弁した。すべて外国から借りてきたのである。
- 5、 この厳しさを認識するゆえ、指導者は、ともかくも日本の勝利を国際的に確定させた。そこに明治の理性があり、明るさというものがあった。
- 6、 ところが「明治の栄光」と讃えられるその時代にも、その戦勝後から俄然、様子おかしくなっていく。日本国は勝ちに乘じ、正しい国内的、ならびに国際的な対処を忘れ始めたのである。
- 7、 指導者たちが厳しい内情を隠したことに始まって、結果として、国民は惨勝とは思わず、世界史に冠たる大勝利の国民戦争であったという夢に、自分たちを駆り立てていった。
- 8、 なぜ、政府や軍部の指導者が事実を覆い隠したのか。いや、事実をありのままに提示することに逡巡したのか。つまり、栄光を目指し遮二無二突き進んできた自負とつけが、複雑に絡み合って、戦勝の結果、満州を掌握したことは、ロシアや清国にプラスしてアメリカとの新たな対立関係を生んだ。すなわち、巨額な負債とともに、微妙複雑な国際関係を残すことになった。
- 9、 そこで、政府は、陸軍の大御所・山県有朋元帥の私案のもとに、明治40年4月、ロシア・米国・清国の3国に同時に対処しうる兵力を整備する大軍拡方針（帝国国防方針）を決定した。
- 10、 この方針のもとに、戦後財政のもっとも厳しいときに、陸軍は平時25個師団（日露戦争時は13個師団）戦時50個師団態勢を、海軍は戦艦8、巡

洋艦 8 を主力とする、いわゆる八八艦隊の増強をそれぞれ要求し、しかも仮想敵国として、陸軍は対ロシア、海軍は対アメリカを個別に想定した。

- 1 1、 指導層が特に恐れたのがロシアであった。山県は、戦争でのロシア陸軍の打撃が小さいこと、復習戦いが近いことを強調し、日露再戦に備える軍備拡大を説いている。この意見に同調する指導者も多く、ロシア恐るべし、の声は次第に大きくなっていった。そんな大軍備の完整など、戦費の大部分を外国債に依存した現状からすれば、誰が考えたってできない相談である。
- 1 2、 とすれば、増税につぐ増税、そして国債募集・献金の強要である。必然的に国民の生活を脅かさざるを得なくなる。具体的には、戦争中に課徴された税金（地租、営業税、所得税、酒税、印紙税など）、あるいは新設されたいろいろな税金（石油消費税、毛織物消費税、相続税、通行税、小切手印紙税、毛織物以外の織物税など）は当然のこと、平和回復後は元に戻すべきであった。それなのに、すべて永久税として徴収を継続されることになった。要するに「気位は高いが金はない」という貧乏国家は、国際的競争に対しては、すこぶる弱体であり、あらゆる無理を国民に強いるほかはなかったのである。
- 1 3、 この貧しさと“強露病”ゆえに、リーダーたちは、一層事実を隠ぺいせざるをえなかった。そして鉦や太鼓で勝利の栄光を謳い、一等国家の「大国民」としての誇りと、報国そして献身とを国民に訴え続けた。つまり「大国主義」の思想を鼓舞した。さらに軍、指導者への論功行賞、大叙勲を寛厚した。
- 1 4、 事実は隠ぺいされ、万事は成功の神話だけが残されていった。遺族そっちのけにして。

1 5、 このように国家と国民がおかしくなっていくつつあるその時、東京帝国大学の英文科の講師であった夏目金之助は、漱石の号をつけて小説を書き始めた。日露講和が成った時を同じくして、処女出版「吾輩は猫である」上巻が世に出た。日露戦争後の加速的に夜郎自大となっていく日本と、漱石は真正面から向き合わざるを得ないことになった。

1 6、 漱石は「それから」のなかで、この「恐露病」という言葉をうまくつかっている。

代助が、ロシア文学好きの友人寺尾と議論する、いささか妙なところで「代助が、文学者も恐露病に罹っているうちはまだだめだ。いったん日露戦争を経過したものでないと話せない、冷評返した事がある。すると寺尾は真面目な顔をして、戦争はいつでもするが、日露戦争後の日本

のように往生しちゃつまらんじゃないか。やはり恐露病に罹っているほうが、卑怯でも安全だ、とこたえてやっぱり露西亜文学を鼓吹していた」

この寺尾の一步退いたような論理は、実は当時、日本の代表的な文学者のそれでもあった。

17、 もうひとつ、明治41年12月20日付けの小宮豊隆あての書簡では、  
「今の自然派とは自然の2文字に意味なき団体なり、花袋、藤村、白鳥の作を有難がる団体を言うにほかならず。而してみな恐露病に罹る連中に他ならず。人品を言えば大抵君より下等なり、理屈を言えば君よりもわからずや、多し」漱石はいわば「主人まちの文学」といった意味で用いたのであろう。そのことで恐露病という流行語が、文学にまで浸透していった事実がわかる

18、 そしてまた、勝利こそがすべてを凌駕する、ということで、軍人が人气的になっていった。軍国的な風潮

19、 しかも漱石は、日露戦争そのものについても面白い見方をしている。

「あれをもう少しやっておってたならば、負けたかもしれない。宣い時に切り上げた。その代わりたくさん金はとれなかった」(模倣と独立)と正確に認識している。

「外国人に対して乃公の国には富士山があるというような馬鹿は、今日は余りいわないようだが、戦争以後、一等国になったんだという高慢な声は、随所に聞くようである。なかなか気楽な見方をすればできるものだと思います」と、一等国意識で国民がいい気持になってうかれていることをきつく戒めている。

20、 このように明治日本を支配するのは金力と権力であった。漱石は今や作家として、そうした俗悪化していく社会と、そして日本人の、とくに若い人々の精神状況をしっかりと見据え、そして心から憂いていたのである。

「近頃は世の中に住んでいるのが夢の中に住んでいるような気がする。どこを見てもまじめなものが一つもない。ことごとく幻影と一般タワイなものである。こんな世界に住んでまじめに苦しい思いをして暮らすのは馬鹿げている。真面目になりえるためには、他人があまり滑稽的である、、、世の中は泣くにはあまり滑稽である。笑うにはあまり醜悪である」

- 21、そして、漱石はこうした浮薄な社会状況に対する批評を重要なテーマとして、「吾輩は猫である」にはじまって、38、9年に書かれた各作品にもちこんでいる。もう繰り返し、繰り返しとっていいくらい「文明批評」を展開している。

「吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果、不自由を感じて困っている」（吾輩は猫である）十一

「文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏みつけようとする」（草枕）十三

「二十世紀はこの桀紂で充満しているんだぜ。しかも文明の皮を厚く被ってるから小僧らしい」「馬鹿に金を持たせるとたいがい桀紂になりたがる」「彼等の様な愚劣な輩は、人を苦しめる為に金銭を使っているし、困った世の中だなあ（二百十日）四」

「世は華族、紳商、博士、学士の世である。付属物が本体を踏みつぶす世である」（野分）三

- 22、山ほどあるなかから、随意気儘に引用しているが、これらはどちらを向いても我利我執にとりつかれている現代社会への、漱石が鳴らした警鐘ということになる。世は毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしいいやなやつで埋まっている、と「草枕」でいう。よう憂えるがゆえに、我執にとらわれず、なんにも拘泥せず、自然に、つつましくひかえている人々を、漱石は愛したのである。それが「坊っちゃん」の清となり、「草枕」では観海寺の和尚大徹となって登場する。

- 23、この独自のものとして開拓し、作品の中に織り込んできた文明批評は、明治40年春に作家一本になったときから、一層、尖鋭化する。

「生涯はただ運命を頼むよりいたしかたなく、前途は惨憺たるものに候。それにもかかわらず大学に噛みついて黄色になったノートを繰り返すよりも、人間として殊勝ならんかと存候。小生向後何をやるやら何ができるやら自分にも分らず。ただやるだけやるのみ候」40年3月23日付、野上豊一郎あての書簡

作家として一本立ちする漱石の覚悟の並々でなかったことが知れる。それだけに「虞美人草」から「三四郎」「それから」「門」と続く作品は、文明批評の観点からみてもすこぶる面白い。当時の日本人（とくに若者）の精神状況を、漱石は冒険的に小説のなかで人物造型し、これに厳しい批評を加えるのである。

- 24、その精神状況とは、大きく分けると次の4つ

- 1、「成功」という流行語で示される立身出世主義
- 2、金があれば万事可能という金権主義、拝金主義、成金主義、

3、世は楽しければいいとする享楽主義

4、生きることの意義を失い懐疑、煩悶に陥るものの増加

25、 とくに金儲け主義による会社の乱立の揚句、40年1月の株式の大暴落が決定的となる。戦争景気の波にのって続出した中小企業がバタバタと倒れた。この恐慌によって財閥は支配権を強め、国家資本と結びつき産業独占の形を整えた。そして、いっぽうに不況と失業にあえぐ民衆の群れ、もう一方に、ますます肥え太っていく資本家、という階級的構図を生んだ。これが多くの若者を煩悶させ、虚無に追い込み、墮落させ、あるいは無気力にならざるをえなくした。

26、 これが漱石を正視し、このままではならないと思っていた社会傾向であったといえようか。「虞美人草」はこうした若者たちの自我意識に主題を据えた。ヒロイン甲野藤尾に「悪徳」と思われるものがすべて仮託されている。およそ献身的とか謙虚さという語にはほど遠く、ただ成功にあこがれる女。享乐的で征服欲強く打算的な女。ひとの許嫁を奪うという自由恋愛に生きる女。藤尾はそのような「私の女」として造形されている。

27、 そして、次の「三四郎」では、冒頭の東海道線車中の紳士と三四郎との会話。

「御互」はあわれだなあ。 …、こんな顔をして、こんなに弱っているは、いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですね。」

「しかし、これからは日本も段々発展するでしょう」と三四郎が弁護すると、紳士は澄ました顔でいうのである。

「亡びるね」

この余りににも有名な、予言ともいふべき個所を読むたびに私は、神妙になる。男のいうように世界の冠たる大日本帝国は、それからわずか37年後に亡びたのである。

28、「それから」になるともっと手厳しい。

「日本は西洋から借金をしなければ、到底立ちいかない国だ。それでいて、一等国を持って任じている。 …、あらゆる方面に向かって、奥行を削って、一等国だけの間口を張っちまった。なまじい張れるから、なお悲惨なものだ。 …、眼のまわるほどこき使われるから、揃って神経衰弱になっちまう。 …、日本国中どこを見渡したって、輝いている断面は一寸四方もないじゃないか。ことごとく暗黒だ」(六)

29、 あるいはこうも言う。日本の20世紀は墮落し来ていると弾劾し、その理由は「生活欲の高圧力が同義欲の崩壊を促した」所以であるとして、「この二つの因数（ファクター）注＝生活欲と同義欲、俗に言えば金儲けと

モラル」はどこかで平衡をえなければならない。けれども、貧弱な日本が、お欧州の最強国と、財力において肩を並べる日がくるまでは、この平衡は日本において得られない、、、。」(九)

- 30、 明治末は、これで見ると、「同義欲の崩壊」つまりモラルの頹廢をきたしている時代でもあったのであろう。と、他人事のようにいつてはられないと背筋にぞくぞくとしたものを感じてしまう。今の日本だって、、、少なくとも欧米列強と「財力において肩を並べる日」が来たら、同義は回復する、とした漱石のこっちの予言の外れたことは、確かである。それ以上に、経済大国になったらますます同義なき国となった。天国の漱石が仰天していることも確かではないか。
- 31、 そして「門」では、——、この小説を書いているとき、漱石は胃腸の具合がひどく悪く、悪戦苦闘していた。脱稿は43年6月5日とされる。そして6月18日には検査の結果、胃潰瘍と診断され、入院加療となる。この直前に「大逆事件」の報道があったのである。幸徳秋水、菅野スガが逮捕されたとの新聞発表が、6月3日、事件の概略の発表が5日である。「門」のお終いは、この新聞記事を読んでから書かれたものではないか。「(お米が)「本当にありがたいわね。ようやくのこと春になって」といって、晴々しい眉を張った。宗助は縁にでて、長く延びた爪を剪りながら、「うん、しかしまたじき冬になるよ」と答えて、下を向いたまま鋏を動かしていた。」
- はたして漱石には、より重苦しい暗鬱な時代到来に対する予感のようなものがあつたのか。
- 32、 いずれにせよ、この8月に「修善寺の大患」がくる。そして大患後の漱石からは、もはや社会悪に対する果敢な挑戦の気力が失われてしまう。その戦いにやぶれた、とはいわないまでも、滔々たる時代の流れの勢いを前に、戦いを諦めたとはいえるかもしれない。
- 33、 そして明治の御代が終息し大正になる。「彼岸過迄」から「行人」「こころ」「道草」そして「明暗」までは、文明批評よりも、人間のこころの問題、エゴイズムそのものに、漱石の目が向けられてしまうのである。